

氏名	近 藤 淳
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	乙 第 170 号
学位授与の日付	昭和41年 6 月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)
学位論文題目	前立腺肥大症の臨床病理学的研究
論文審査委員	教授 大村 順一    教授 小川 勝士    教授 妹尾左知丸

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

前立腺肥大症の病理組織像の解明を目的として、臨床的に肥大症と診断され剔出された前立腺を実験材料として研究を行った。先づ前立腺肥大症の病理組織学的所見の種々相を把握した後、従来用いられている主観的な病理組織学的分類法を基として、腺葉構造保持性と初期結節の有無を考慮に加えた量的主観の加わらない客観的な分類を行い、それらの各腺型の組織学的特長を述べた。

次に確かな臨床症状の現れとして尿閉をとりあげ、尿閉例と非尿閉例の組織像の差異を検索し、尿閉の固定的要素として腺腫の大きさの占める役割が重要なことを組織学的にも示し、更に可動的要素としては間質内細胞浸潤をあげた。抗男性ホルモンについては投与例では非投与例に比し腺腔拡大の量的減少、核の相互間隔の縮少、胞体の不鮮明化、腺腔内容物の減少等の組織学的変化を認めた。異型の増殖の一つである扁平上皮化生は悪性像を認めず、その発生因子としては抗男性ホルモン投与が重要な役割を果していた。尚潜在性癌に関しては 5%に認めたが、従来の報告の発生頻度の差異は剖検材料と手術材料の差異に基くものであり、この用語の意義についての統一が望ましい点を述べた。

岡山医学会雑誌, 78巻, 2, 3号, 昭和41年3月掲載予定

## 論文審査の結果の要旨

近藤淳提出の「前立腺肥大症の臨床病理学的研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は、次の通りである。

臨床的に前立腺肥大症と診断され剔出された前立腺を実験材料として病理組織学的検索を行い次の如き結果を得た。

- 1) 従来用いられている主観的な病理組織学的分類法を基とし、腺葉構造保持性と初期結節の有無を考慮に加えた量的主観の加わらない客観的分類を行い、それら各腺型の特長を述べている。
- 2) 確かな臨床症状の現れとして尿閉をとりあげ、尿閉例と非尿閉例の組織像の差異を検索し、尿閉の固定的要素として腺腫の大きさの占める役割の重要なこと及び可動的要素として間質内細胞浸潤をあげた。
- 3) 抗男性ホルモン投与では非投与例に比し腺腔拡大の量的減少、核相互間隔の縮小、胞体の不鮮明化、腺腔内容物の減少等の組織学的変化を認めた。
- 4) 扁平上皮化生は悪性像を認めず、その発生因子としては抗男性ホルモン投与が重要な役割を果たしていた。
- 5) 潜在性癌は5%に認めたが、従来の報告の発生頻度の差異は剖検材料と手術材料の差異に基づくことが多く、この用語の意義についての統一が望ましいことを述べている。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり著者は医学博士の学位を授与せらるべき学力を有すると認める。